

# 中田遺跡他発掘調査報告

—寝屋川流域下水道事業に伴う—

2003年3月

大阪府教育委員会



# 中田遺跡他発掘調査報告

—寝屋川流域下水道事業に伴う—

2003年3月

大阪府教育委員会

## はしがき

大阪府八尾市は、河内平野の南東部に位置しています。河内という名が示すようにこの地域の歴史は、そのまま治水の歴史であり、地中深くに埋もれた遺跡が数多く存在します。中田遺跡もそのひとつで、弥生時代から中世に至る複合遺跡として注目されてきました。

大阪府教育委員会は、大阪府土木部の寝屋川流域下水道事業に伴い、中田遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡、亀井遺跡、山賀遺跡、植松遺跡、6遺跡の下水管渠・立坑等予定地の発掘調査を実施してまいりました。本年度の調査では各遺跡で、弥生時代から古墳時代を中心とした遺構、または遺物を発見し、東郷遺跡では縄文時代後期、晩期の土器片を発見、そして植松遺跡では古墳時代前期の勾玉を発見しました。

これらの調査成果により各遺跡の集落等の様相の一端が明らかになると共に、地域の歴史像を豊かにしていくものと思われます。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝申し上げますと共に、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は、寝屋川流域下水道事業に先立って実施した八尾市所在の中田遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡、亀井遺跡、山賀遺跡、植松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査に要した経費は国土交通省の補助金を得て大阪府土木部が全額負担した。
3. 現地調査は、大阪府土木部の依頼を受け文化財保護課調査第一グループ主査泉本知秀を担当者として平成14年4月19日から平成15年3月27日まで実施した。遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ技師山田隆一・小浜 成が担当し、平成15年3月すべての作業を終了した。
4. 本書の執筆は泉本知秀、山田隆一（中田遺跡の遺物）が分担し、編集は泉本が担当した。
5. 本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は1,659円である。

## 本文目次

第1章 調査経過	1
第2章 調査結果	2
中田遺跡	2
東郷遺跡	8
小阪合遺跡	12
亀井遺跡	14
山賀遺跡	17
植松遺跡	21

## 挿図目次

図1 発掘調査地点	図12 亀井遺跡発掘調査位置
図2 中田遺跡発掘調査位置	図13 亀井遺跡平面
図3 中田遺跡平・断面	図14 亀井遺跡東壁断面
図4 中田遺跡出土遺物	図15 山賀遺跡発掘調査位置
図5 中田遺跡出土遺物	図16 山賀遺跡平面
図6 東郷遺跡発掘調査位置	図17 山賀遺跡断面
図7 東郷遺跡平面	図18 山賀遺跡出土遺物
図8 東郷遺跡西壁断面	図19 植松遺跡発掘調査位置
図9 東郷遺跡出土遺物	図20 植松遺跡平面
図10 小阪合遺跡発掘調査位置	図21 植松遺跡断面
図11 小阪合遺跡平・断面	図22 植松遺跡出土遺物

## 図版目次

図版1 中田遺跡発掘調査地点	図版7 小阪合遺跡北西部溝／断面
図版2 中田遺跡溝／西壁断面	図版8 亀井遺跡調査区全景／断面
図版3 中田遺跡出土遺物	図版9 山賀遺跡暗渠・土坑／溝
図版4 中田遺跡出土遺物	図版10 山賀遺跡下層断面／出土石器
図版5 中田遺跡出土遺物	図版11 植松遺跡溝1・3／断面
図版6 東郷遺跡土坑1～3／断面	図版12 植松遺跡出土遺物

第1章 調査経過

大阪府土木部の寝屋川流域下水道事業に伴い、今年度は八尾市内で6遺跡8ヶ所の立坑等の発掘調査の依頼があり、下図の8ヶ所を順次繰り合わせながら、ほぼ1年間を通して調査を実施した。調査に着手または終了した順番に6遺跡の記述を行うこととする。

それぞれの発掘地点の遺跡名、町名を記す。1は中田遺跡で中田5丁目地内、2は中田遺跡で八尾木北6丁目地内、3は東郷遺跡で光町2丁目地内、4・5は小阪合遺跡で南小阪合町1丁目地内、6は龜井遺跡で南龜井町3町目地内、7は山賀遺跡で新家4丁目地内、8は植松遺跡で永畠町2丁目地内である(図1)。

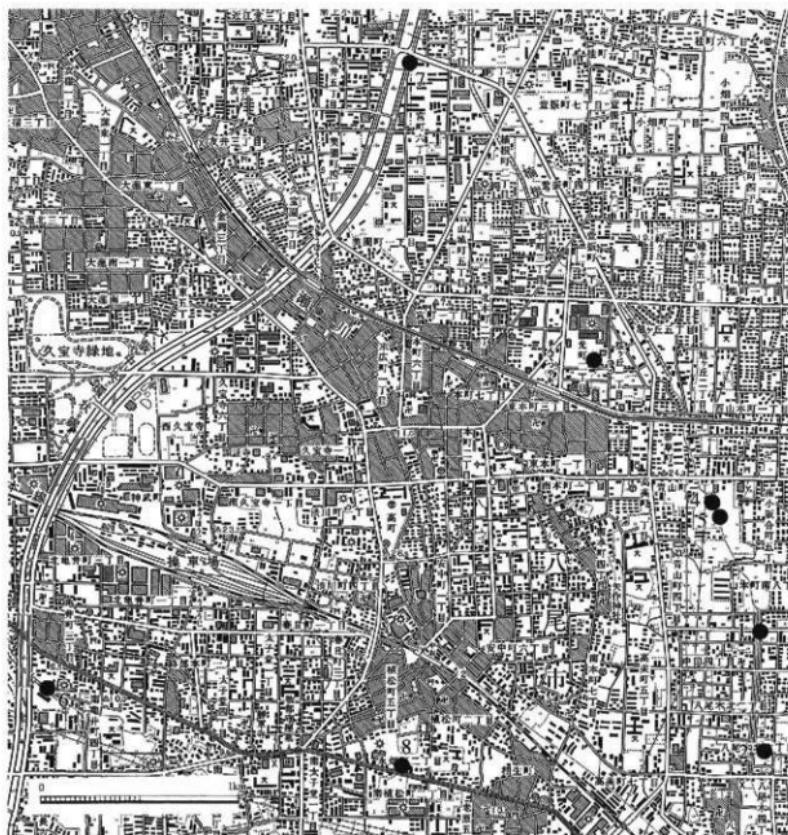


図1 発掘調査地點1~8

## 第2章 調査結果

### 中田遺跡（図2・3、図版1・2）

2ヶ所の立坑予定地を対象とした。中田5丁目の地点は道路交差点の中で18m<sup>2</sup>を発掘した。覆工板設置のため、どの深さまでいけるかを調べるために試掘調査を行った。地表下1.2mまで掘削できれば覆工板設置工事が可能で、ちょうどその深さから下に遺物包含層があることが判明したので、覆工板設置後に発掘調査を開始した。現地表下1.2~1.4mの間で須恵器、土師器、瓦器の細片が少量出土した。精査すると砂の面が現れ、調査区南端部で古式土師器の破片が出土した。調べると溝状の落ちこみが検出された。調査範囲が狭いため溝か土坑か判然としないが、溝としておく。幅1.4m、深さ40cm、長さ2m以上の東西方向に長い遺構である。埋土は粘質土で、西半部に集中して土器が30数個体分出土した。基盤のベースとなる層は粗砂層で湧水が激しい。当時の切りこみ面には粘土層が堆積していた管で、後世に削平されたものであろう。粗砂層は深さ1m程掘り下げたが遺物は見つからなかった。地盤改良工事後に下層の観察を行ったが遺構・遺物は検出されなかった。

八尾木北6丁目の地点は地下埋設物で大半掘り返されており、残存部を試掘したが遺構・遺物は発見されなかった。深さ3mまで観察したが粗砂層はなく粘質土であった。

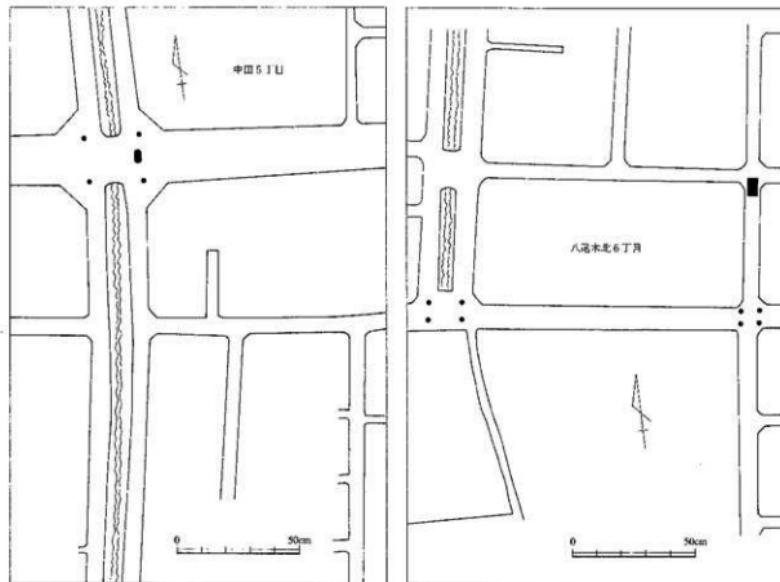


図2 中田遺跡発掘調査位置

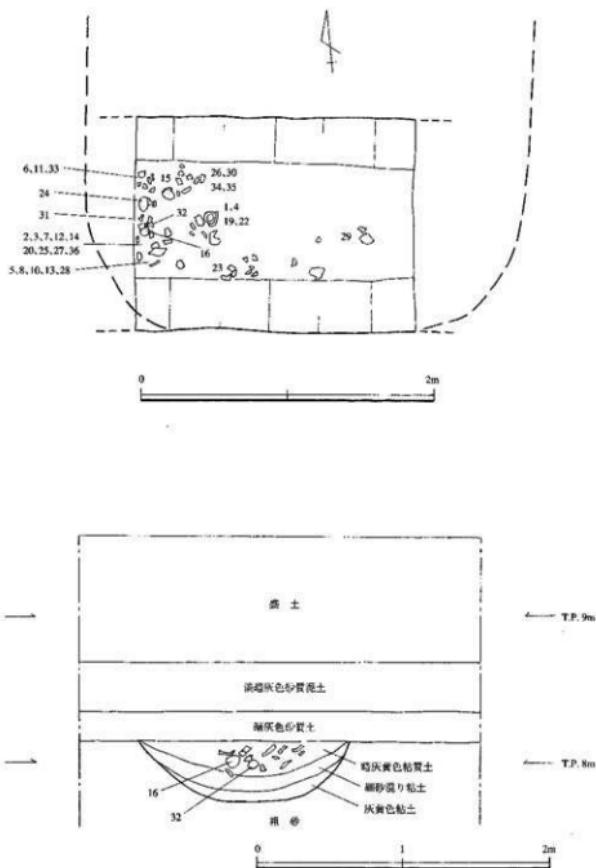


図3 中田遺跡平・断面図

出土遺物（図4・5） 壺は広口壺と他地域から搬入された二重口縁壺、および体部がある。壺体部はいずれも尖り底である。個体数は少ない。

広口壺1は、口縁端部に粘土を付加して拡張部を作る。端面に粗い単位のクシ描き直線文、2個1組の竹管円形浮文を6方に巡らせる。頸部内外面はハケメの後、丁寧にナデ仕上げる。にぶい黄橙色（10YR 7/2）を呈し、石英、長石、チャートからなる1～3mm程度の粗砂を多量に含む。二重口縁壺2は、形態および胎土から搬入品と考えられる。拡張部の上・下端部に弱いキザミ文、外面にかなり雑な擬凹線を巡らせる。頸部外面は縦方向ハケメの後、ヘラミガキ仕上げ。

内面は摩滅で調整不明。橙色（5YR 6/6）を呈し、石英、長石、クサリ礫からなる粗砂を多量に含む。壺3は下部3cmで明瞭なプレスが認められ、これを境に調整が異なる。下部は内外面ナデ仕上げ。上部外面は叩きの後ナデ仕上げ、内面はカキトリ気味のハケメである。壺4の外面は、叩き→ハケメ→ヘラミガキの順に調整するが、底部のみナデ上げる。内面はハケメの後、ナデ上げるが部分的に横方向ナデを施す。

壺には弥生時代後期以来の伝統的な叩き壺と庄内壺、およびその中間形態の壺の他、ハケ仕上げの壺、他地域からの搬入品が認められる。

5~13は叩き壺で、体部内面はナデ、工具ナデ仕上げであり、ヘラケズリは施さない。5のみは他の叩き壺と比較して器壁が厚く、口縁端部をつまみ上げる特徴があり、胎土・色調においても異なる。橙色（5YR 7/8）を呈し、石英、長石、クサリ礫からなる粗砂を含む。叩き壺6~13は類似した資料で、体部外面右上がり叩きで、口縁部はいずれも叩き出している。色調は、灰褐・にぶい褐色・灰黄褐・にぶい褐黄色を呈し、粗砂を含む。口縁部ヨコナデ、体部内面は接合痕を残したままにナデ、あるいは板ナデ仕上げ。口縁端部は丸く終わらせるものが主体であるが、13のみは面を有している。叩き単位も弥生時代後期と同様に粗いもので、2条/cm（8・9・11）、2.5条/cm（12）、3条/cm（5・10・13）、3.5条/cm（6・7）である。

14~23は内面ヘラケズリの壺であるが、個体差が著しい。14は使用による表面剥離が著しい。外面は叩き（3条/cm）の後、ハケメ。15は外面叩き（3・5条/cm）の後、下半にハケメ。内面ヘラケズリを施すも、庄内壺ほどには器壁を薄くせず、また内面稜線もあまい。にぶい橙色（7.5YR 7/3）を呈す。16は倒卵形体部に、2.5cm程度のレンズ状底部を有する。外面叩き（2.5~3条/cm）の後、下半にハケメ。ハケメは部位により方向は様々で統一性がない。橙色（5YR 6/6）を呈し、角ばった5mm前後の長石、石英からなる小礫が目立つ。17は通常の生駒西麓産胎土の庄内壺で、口縁端部は丸くする。叩き単位は4条/cm程度で、口縁部は叩き出しによる。内面ヘラケズリで器壁は薄く、稜線も鋭い。18は庄内壺で、口縁端部は若干つまみ上げる。明褐灰色（7.5YR 7/1）を呈し、角閃石の細粒を多量に含む。叩き単位は4.5条/cmで、口縁部は叩き出しによる。内面の稜線はあまい。19は左上がり叩きの庄内壺で、口縁端部は若干つまみ上げる。暗褐色（7.5YR 3/4）を呈し、クサリ礫が目立つ。叩き単位は4.5条/cmで、口縁部は叩き出しによる。20は通常の生駒西麓産胎土の庄内壺で、口縁端部は若干つまみ上げる。叩き単位は3.5条/cmと粗い。屈曲部外面はヨコナデにより丸く、内面稜線は極めて鋭い。21は生駒西麓産胎土の庄内壺で、口縁端部はつまみ上げる。内面ヘラケズリで稜線は鋭い。体部外面は摩滅のため調整不明。22は生駒西麓産胎土のハケ仕上げの壺。口縁部は外反させ、端部は丸くおさめる。体部下半は放射状、上半は断続的なハケメを施す。23は通常の生駒西麓産胎土の庄内壺で、口縁端部は鋭く尖らせる。最大径は体部のやや上にあり、尖り気味の底部と考えられる。体部外面はハケメであるが、肩部は摩滅のため叩きの有無は不明。内面ヘラケズリで稜線は鋭い。

壺24は形態、胎土から搬入品で、北陸系である。灰白色（2.5Y 8/2）を呈し、胎土には微細~

1 mm程度のチャート、石英を著しく含む。口縁部には6条以上のクシ状工具を巡らせた後、ヨコナデによって擬凹線にする。体部外面は下半に縦ハケの後、肩部横ハケ。内面は下半に縦ヘラケズリの後、肩部横ヘラケズリ。外面に煤付着。

鉢には壺と同様の口縁部を有する中型品と碗状の小型品がある。中型鉢25は、右上がり叩き(2.5条/cm)で、口縁部は叩き出す。体部内面ナデ仕上げ。胎土、色調、調整とともに叩き壺と同様ながら、煤は付着しない。小型鉢26は、叩き(3条/cm)と上げ底部を指頭で作る。内面はハケメの後、ナデ仕上げ。小型鉢27は、ドーナツ底を生する。内外面はいずれも板状工具痕が残り、ナデ仕上げ。

脚台28は上部形態不明。5方スカシ。煤、および被熱痕跡はない。若干内湾傾向で、接地部が内側につぶれる状況は高杯31~34と同様である。内外面板ナデ、体部との境に叩き痕が残る。

高杯には一般的な形態のもの(壺部のみ)の他、異形の一群、および搬入品がある。

高杯29は内外面摩滅のため調整不明。4方スカシ。高杯30は、体部との接合部分で欠損した低脚高杯で、接合において棒突きを行う。4方スカシ。表面は変色するが、本来の色調は橙色(5YR 6/8)を呈し、石英、長石を含むが、殊に微細な長石粒が極めて多量に含まれることが特徴的で、搬入品と考えられる。壺外面のハケメは細かく鋭い。

高杯31~34は、若干の法量の差はあるものの、形態と胎土がほとんど同じである。いずれも外面に稜線のない杯部で、裾は短く内湾させ、接地面は内側につぶれる。3方スカシ。にぶい黄橙色(10YR 6/4)を呈し、胎土には粗い石英、長石の他、微細な角閃石、雲母を多量に含み、生駒西麓産と考えられる。詳細に観察すれば、口縁部が若干内湾する31・33と、外反する32・34があり、前者の内面には弱い稜線が形成される。調整は32・33が脚部外面に、34が体部内面にヘラミガキを施す以外、全面ナデ仕上げである。

高杯36は形態、胎土から搬入品で、近江あるいは東海系と考えられる。橙色(2.5YR 6/8)を呈し、胎土には角ばった4~7 mm程度のチャート、長石、石英小礫を多く含む。3方スカシで、内外面摩滅のため調整不明。

通常、高杯をみれば時期の概略を知ることができるのだが、極めて得意な形態で難しい。現状では、これらの遺物の時期を最も明瞭に示すのは、14~23の内面ヘラケズリの壺であり、特徴を列記すれば以下のとおりである。

1) 14~21、23は庄内壺の範疇で理解できるものであるが、個体差が著しい。非生駒西麓産胎土の14~16の口縁端部はつまみ上げておらず、形態も三者三様である。

生駒西麓産胎土の17~21、23の口縁部は、17が丸くおわる以外、つまみ上げるのであるがやはり個体差が著しい。また、生駒西麓産胎土にしても個体差がある。

2) 庄内壺の叩き単位が2.5~4.5条/cmで、伴出した第V様式以来の伝統的な叩き壺とほとんど変わらない。盛期の庄内様式新相の庄内壺の叩き単位が、10条/cm前後であることからすれば極めて粗い。

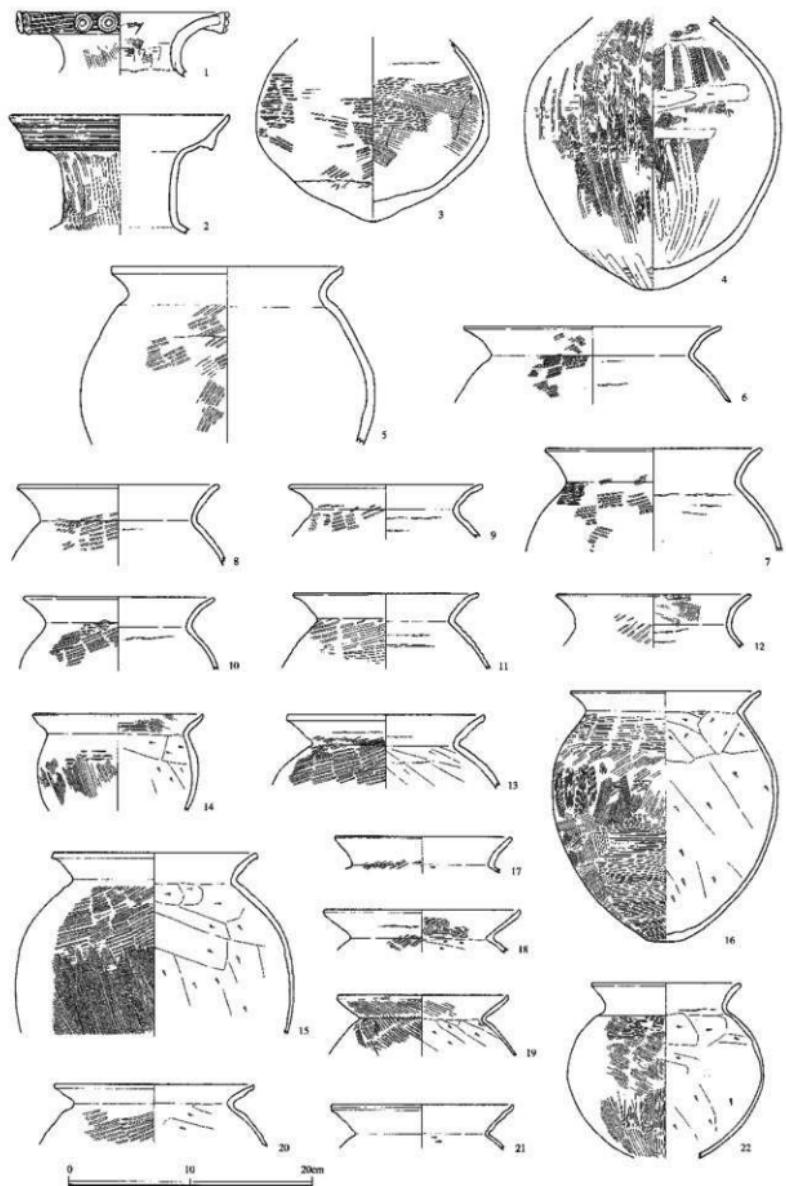


図4 中田遺跡出土遺物

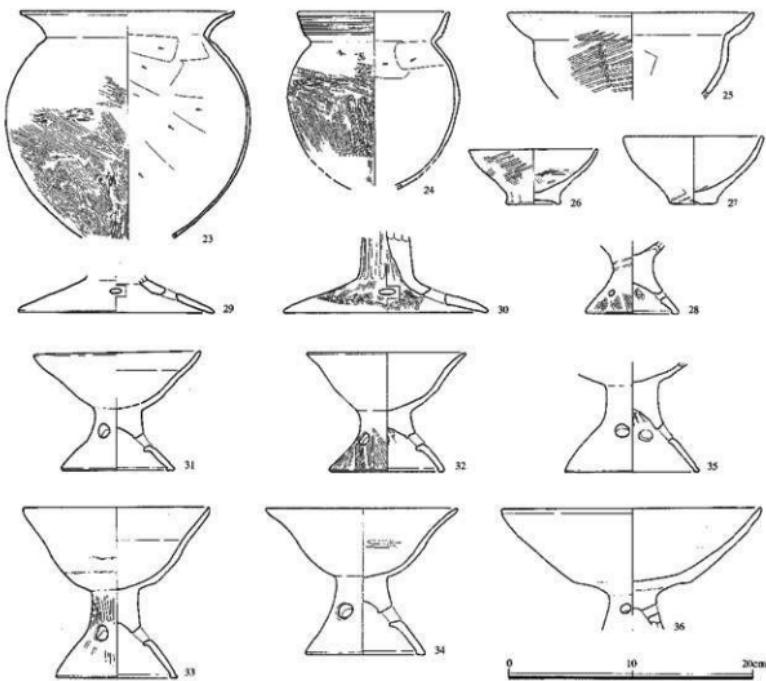


図5 中田遺跡出土遺物

中河内地域の古式土師器については、庄内甕を主軸にした米田敏幸氏による編年がある。それによれば、庄内Ⅰ式の庄内甕は定型化以前のもので、口縁端部をつまみ上げることではなく、胎土も在地の沖積平野部ものであることが多い。また、庄内Ⅱの庄内甕は口縁端部をつまみ上げ、胎土も生駒西麓産であることが一般的になる、とされている。つまり本資料は米田氏編年によれば、庄内Ⅰ式とⅡ式の要素を有することになる。14~17は庄内Ⅰ式、18~21、23は庄内Ⅱ式的な要素であるが、個体差が著しいものの、叩き単位が粗い部分でまとまっていること等から、庄内Ⅰ式からⅡ式にかけての過渡的様相を帯びた一括性の高い一群と考えておきたい。以上の点から現状では、個体差が著しいものの口縁端部をつまみ上げる生駒西麓産胎土の庄内甕が出現していることから、庄内Ⅱ式の古相段階に位置付けておきたい。

### 東郷遺跡（図6・7・8、図版6）

発掘調査地点は光町公園内と現道敷両方にまたがるために、先に公園部を調査し、道路部を3回に分けて、計4区画を調査した。G.L.-1.4m (T.P.6.3m)あたりの第1遺構面で溝4本と鋸溝状の凹みを検出した。溝はいずれも東西方向である。溝1は幅1.1m以上、深さ10~15cmで、埋土は淡灰茶色粘土である。土師器の細片が出土したが年代は不明である。溝2・3は幅20cm前後、深さ6~10cmであった。鋸溝状で近・現代の可能性がある。溝4は幅0.9~1.2m、深さ8~10cmで、埋土は淡灰色粘質土で中から須恵器、瓦器、陶磁器の破片が出土した。江戸時代に属する。さらに数cm掘り下げた第2遺構面で1~3mの大きさの土坑を4個検出した。土坑2から図9の16の弥生土器底部が出土した。上限は弥生時代中期後半となるが、遺構の詳細年代は不明である。埋土はいずれも淡灰褐色粘質土であった。これらの基盤ベース土は粗砂層である。この粗砂層を深さ1m強 (T.P.5m) 掘り下げたところ、縄文土器、弥生時代前期・中期の土器片、サヌカイト剥片、木片等がコンテナに2箱分出土した。この粗砂堆積は旧大和川の氾濫によるものであろう。その後、渠架け、地盤改良を終了した時点で下層の調査を行った。G.L.-4m (T.P.3.8m) で粗砂層はなくなり、その下はシルト層、粘土層となった。その直下のG.L.-5m (T.P.2.8m)あたりで黒色粘土層が認められた。G.L.-6mまで確認したが遺構・遺物は検出されなかつた。図9の1~4は縄文土器である。1は後期末~晩期初頭で、2・3は晩期の波状口縁の鉢である。4は刻目突帯の晩期長原式である。16を除き1~17はすべて粗砂層からの出土である。18は石製の長方形硯の海部である。19は瓦質の小皿で、20は土師器の小皿である。硯、小皿は床土直下から出土した。固化していないが、瓦の破片も数点出土している。古代~中世の瓦で東郷発寺との関連があるかもしれない。

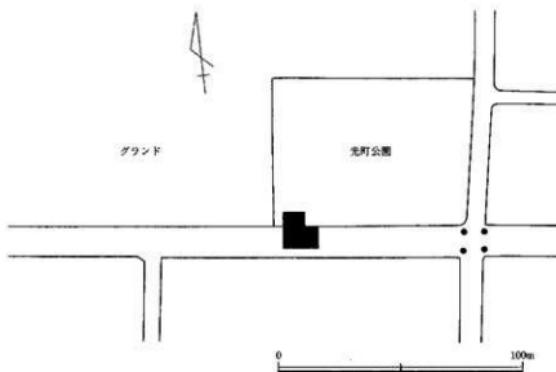
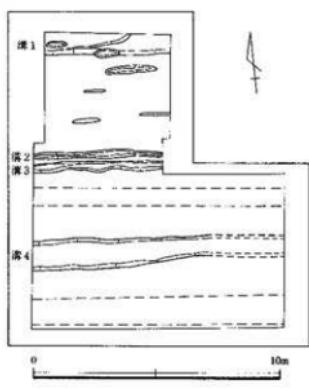
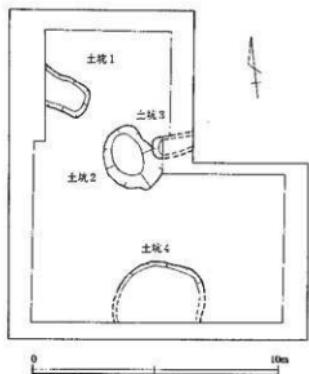


図6 東郷遺跡発掘調査位置



第1面



第2面

図7 東郷遺跡平面

図8 東郷遺跡西壁南北断面図

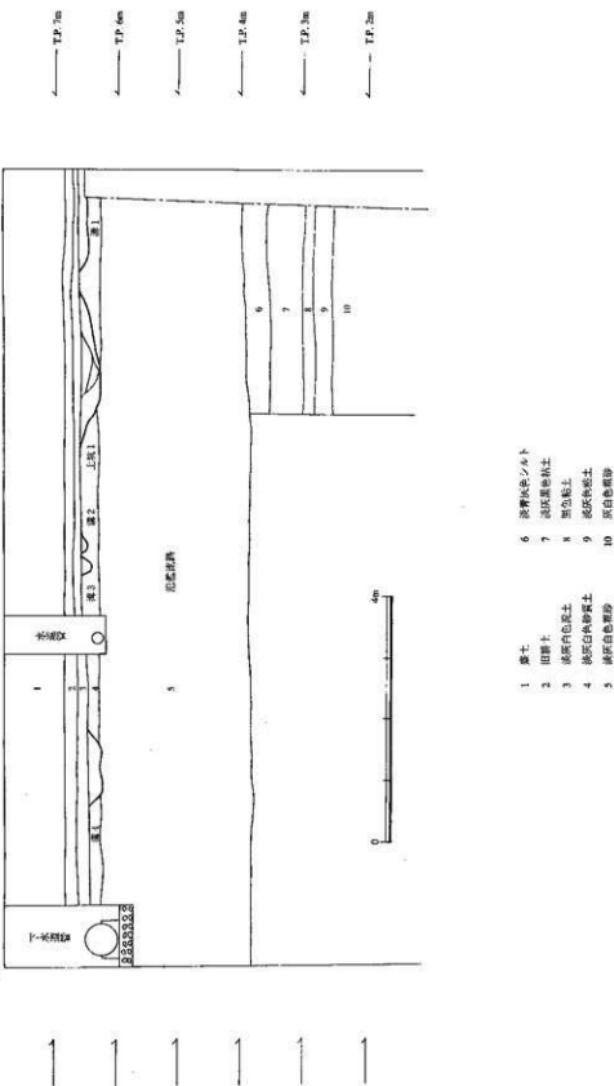


図8 東郷遺跡西壁南北断面図

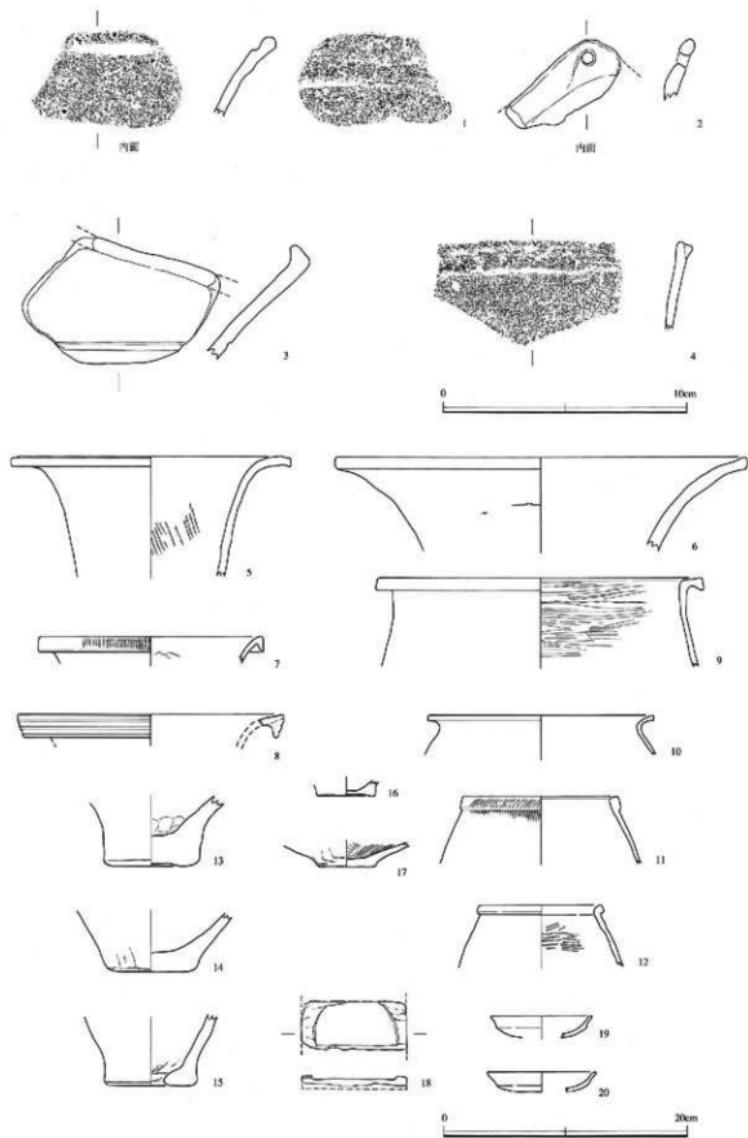


図9 東郷遺跡出土遺物

### 小阪合遺跡（図10・11、図版7）

2ヶ所の立坑予定地を対象とした。いずれも南小阪合1丁目である。小阪合ポンプ場の敷地内で、北西部と南東角部の2ヶ所である。北西部の調査区は、G.L.-1.5mで旧耕作土（現代）があり、さらに50cm掘り下げたところの調査区東半分で東西方向の鋤溝を検出した。溝幅は20cm強、長さ3.5m、深さ数cmであった。さらに15cm掘り下げた面（T.P.7.05m）でも鋤溝が検出された、この面の鋤溝は東西方向と南北方向に交叉していた、南北方向の鋤溝が東西方向の溝を切っていた。新旧の差はあっても年代差はあまりないであろう。現代の耕作土から50~60cmの深さであり、土層は粘質土であることから水田として耕作されていたものと推定される。遺物は1~2cm大の土師器の細片が2点出土しただけで、年代は不明だが、南東角部の調査でこのレベルから瓦器片が出土しているので、中世に属する可能性がある。

この面の下では遺構・遺物はまったく検出されなかった。シルト層が4層分、厚さ70cm堆積しており、その下のG.L.-2.9m（T.P.6.3m）あたりで黒色粘土、灰色粘土が20数cmの厚さで堆積していた。それ以上、現状のままで掘り下げるのは危険といわれ、渠を架けてから、さらによ下層を掘削した。G.L.-3.4m（T.P.5.8m）から下は、厚さ1.5mの細砂層でかなりの期間、水の流れがくりかえされていたと考えられる。遺物が出土していないので分からぬが、周辺の調査例からみてこの細砂層は弥生時代から古墳時代の間に属するのではないかと推定される。

南東角部の調査は、工法上、素掘りの調査で面積も小さくて、深さ3.2m（T.P.5.6m）までを調査した。G.L.-1.5m（T.P.7.3m）の面で瓦器片、土師器片が数点出土した以外、遺構等も検出されなかった。

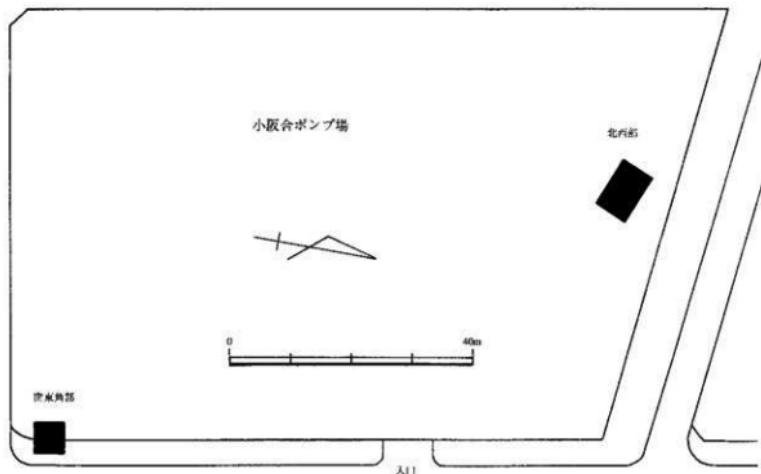
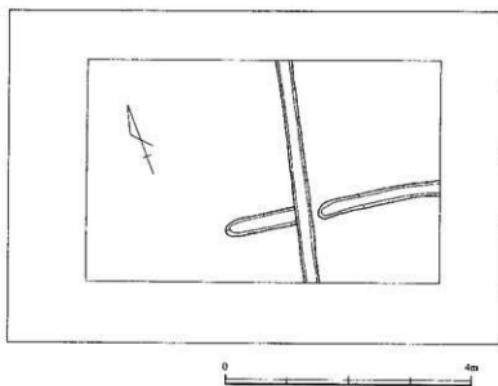
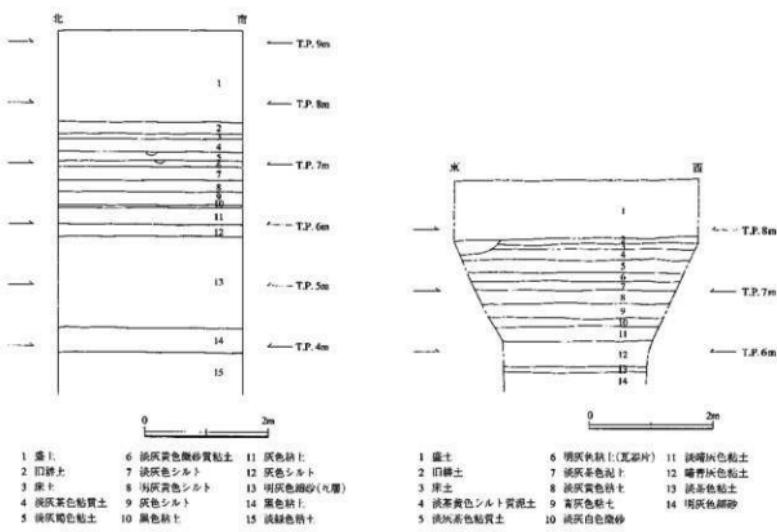


図10 小阪合遺跡発掘調査位置



小阪合遺跡北西部平面



北西部東壁断面

南東角部南壁東西断面

図11 小阪合遺跡平・断面

### 亀井遺跡（図12～14、図版8）

発掘調査対象地は府営長吉ポンプ場の敷地内の北西端部分である。昨年度、今年度発掘調査区の西方20mの位置で立坑部の発掘調査を実施し、方形周溝墓、木棺が発見されている。今年度の発掘は、昨年度調査した立坑から平野川へ排水するための吐口工事予定地である。立坑工事の場合には深さ25～30mまで掘削するが、今回の吐口は深さ4～5mまでしか掘削しない工事である。昨年度の立坑調査時に深さ2.5mまで試掘調査を行い、盛土の範囲内であることが判っていた。矢板設置後G.L.-2.5m（T.P.7.6m）までの盛土を取り除く工事が終了した時点では発掘調査を開始した。掘り始めてすぐ多量の弥生前期～後期の土器の破片が出土した。土器が多量に出土する黒色粘土層からビニールやガラス片も一緒に出てきた。1.5mの厚さのこの土層中から弥生土器の他、サヌカイト剥片、磨製石器破片、須恵器片、陶磁器片等が出土し、1958年製のガラス瓶も含まれていた。現河川は1960年代に付け替えられたもので、それまでは今回の調査区が河道であった。付け替え工事の時に近くの弥生土器包含層を掘り起こし埋立てたものと推定される。黒色粘土はG.L.-4.0m（T.P.6.2m）あたりでなくなり、その下層はきれいな粗砂層であった。この粗砂層を約1mの厚さ調査したところ、量は少ないが弥生時代後期の土器が検出された。大きな破片で完形に近い高杯等も出土した。この粗砂層は後世の搅乱をうけていない可能性がある。しかし、工事がこのレベルまでなので、その下層の確認はしなかった。

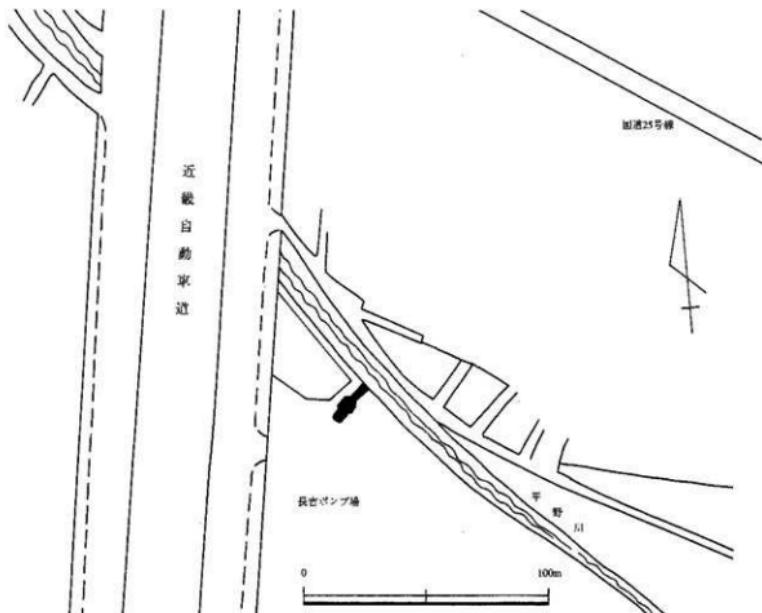
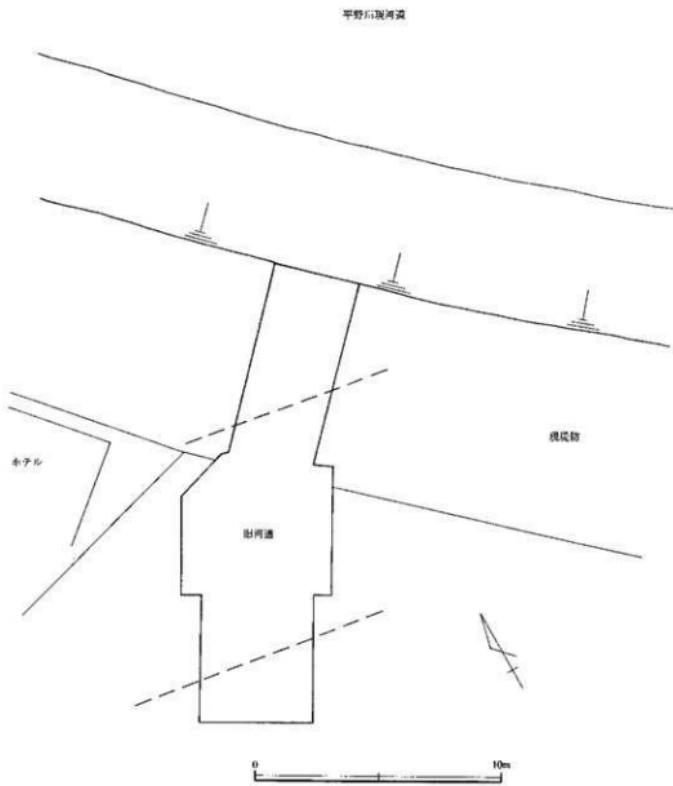


図12 亀井遺跡発掘調査位置



長吉ポンプ場

図13 龜井遺跡平面

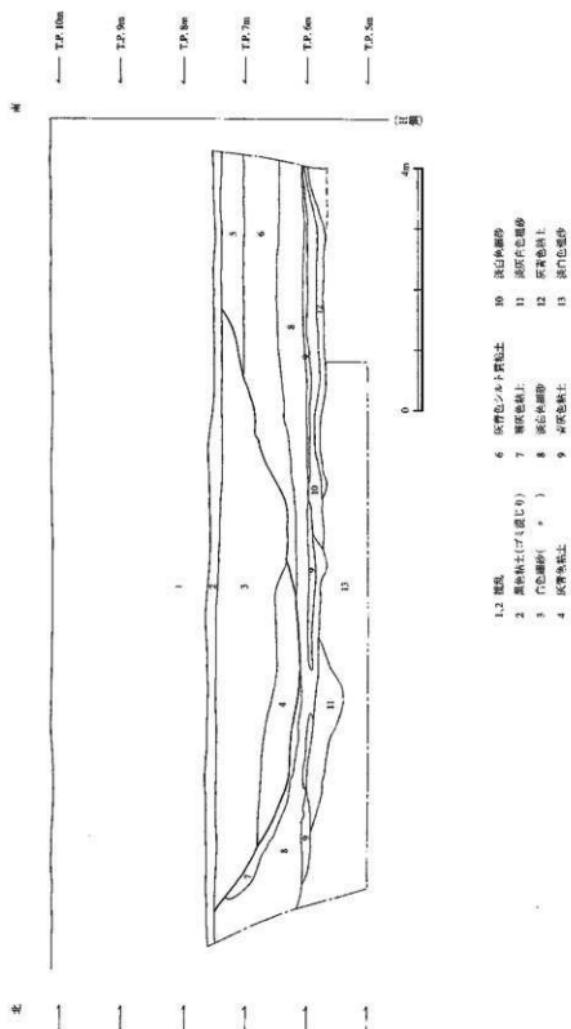


図14 龜井遺跡東壁南北断面

### 山賀遺跡（図15～18、図版8）

発掘対象地は近畿自動車道と大阪中央環状線にはさまれた部分で、新家交差点に南隣する部分である。山賀遺跡の今回の調査地点のG.L.はT.P.5.44mを測る。G.L.-1.2mで旧耕作土（現代）があり、その下部から切り込んだ暗渠が発見された。この暗渠は調査区内中心より西寄り部で南北方向に掘られたもので、上幅約50cm、深さ約60cmを測る。暗渠の底部には径2～3cm、長さ1m前後の小枝が数cmの厚さで重ねられて入っていた。取り上げても折れず、しっかりとしていた。この南北方向の暗渠に取り次ぐ形で北端近くで西に延びる暗渠が検出された。その底部には孟宗竹が埋められていた。G.L.-2.3m（T.P.3.1m）あたりで図18の5の須恵器が出土した。T.P.2.4mあたりで調査区の北側において溝状の落ちこみが検出された。遺物は出土していない。T.P.1.6～T.P.2.0mのあたりは粗砂層で洪水痕跡と考えられる。粗砂を取り除いた面で人間の足跡がいくつか検出された。水田面の可能性もあるが、畦畔は認められなかった。T.P.1.5mの暗渠色粘土層の中から図18の1の石器が出土した。T.P.1.4mでは図18の2の弥生前期の土器片が出土した。このレベルあたりは弥生時代前期に属すると考えられる。それ以下の土層からは遺物は出土しなかった。T.P.1.0mあたりで厚さ約30cmの黒色粘土層がある。T.P.0.4mとT.P.0.0mにはそれぞれ厚さ10cmの黒色粘土層がある。従来の調査例から縄文晩期と推定される。これらの層にはカニの巣穴と考えられる凹みが多量に認められた（図版10）。T.P.-1m近くまで手掘りをおこなったが、遺構・遺物は検出されなかった。その後、さらに下層の機械掘削土を観察するとT.P.-4.5mまでは砂層でその3m下のT.P.-7.5mまでの粘土層中でハイガイを中心とした貝殻数種が認められた。またさらにその5m下のT.P.-12.5mまでの粘土層中でハマグリを中心とした貝殻数種が認められた。

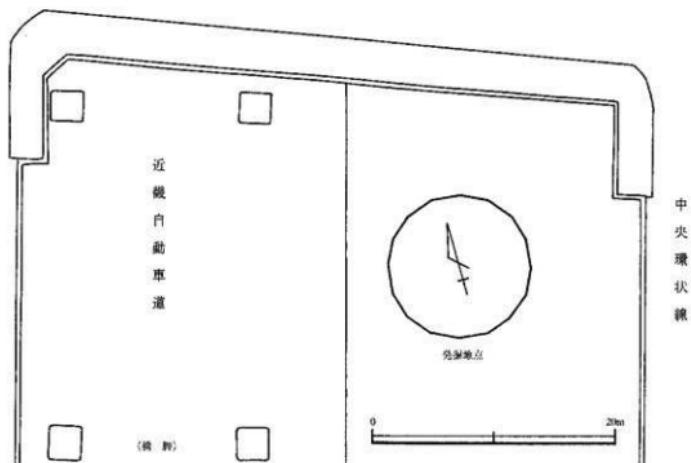


図15 山賀遺跡発掘調査位置

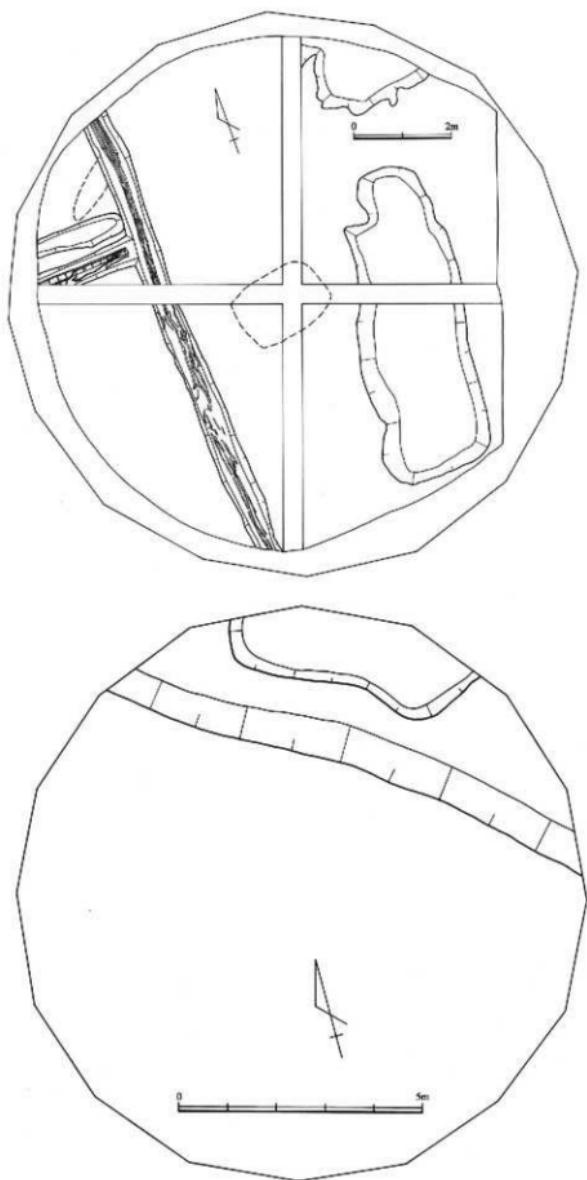
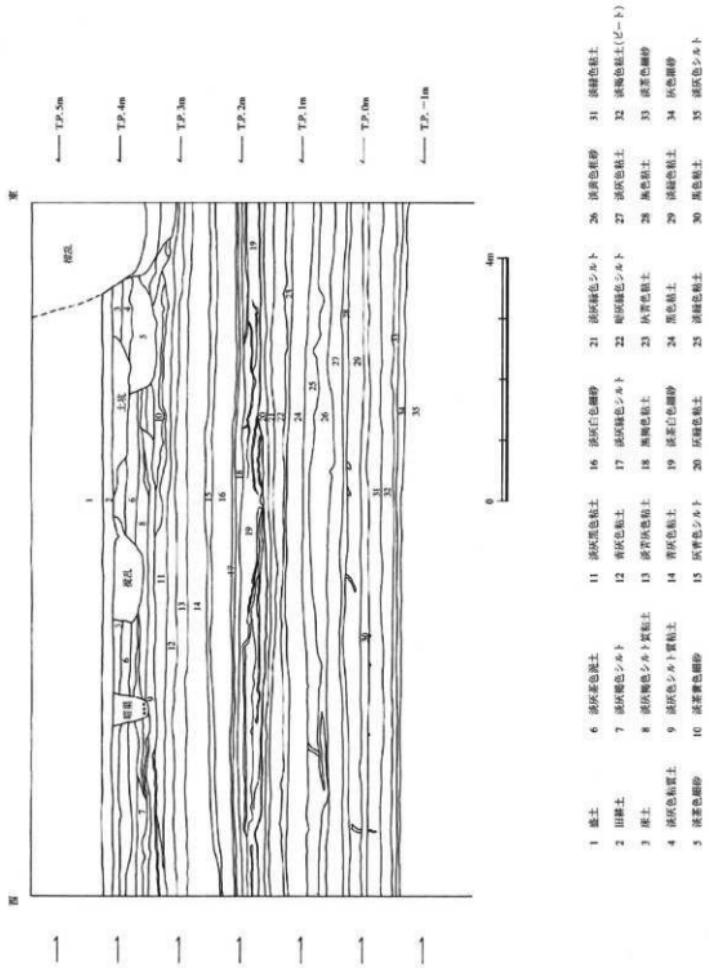


図16 山賀遺跡平面



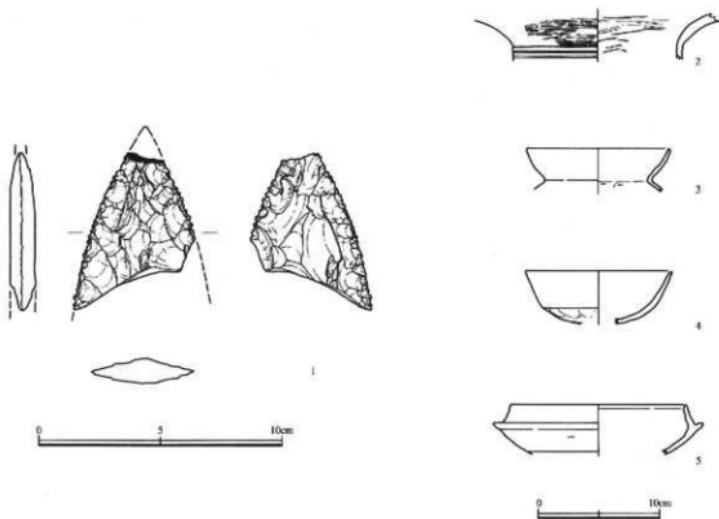


図18 山賀遺跡出土遺物

### 植松遺跡（図19～22、図版11・12）

植松遺跡の発掘調査対象地は民間敷地と現道部にまたがる立坑予定地である。北半分の民間敷地を先行して発掘調査した。G.L.はT.P.10.8mである。G.L.-85cmまでは土が入れかえられていた。南接する現在の水田耕作面はT.P.10.7mである。T.P.9.95mあたりを精査すると1～5m大の土坑が8個検出された（図21）。江戸時代以降に属する。その直下で溝2本が確認された（図21の東西断面）。いずれにも細砂層、シルト層が堆積していた。遺物は出土していないが、旧大和川の氾濫堆積と考えられ、江戸時代初期頃と推定される。T.P.9mの面で南北方向の小溝（溝3）が検出された。幅50cm前後で、深さは5～6cmであった。直上の土層から瓦器の細片等（図22の23～26）が出土しているので、溝3は中世に属する。T.P.8.55mの面でも南北方向の小溝（溝4）が検出された。直上から黒色土器の破片（図22の20～22）が出土しているので、溝4は平安時代に属する。その直下60cm G.L.-3.0m（T.P.7.8m）までの層は粘土層であったが、遺構も遺物も検出されなかった。渠架け、地盤改良後に調査を再開した。図21の南北断面図の破線部は地盤改良によるコンクリートの湧き出た部分である。T.P.8.2mから下の数10cmに粘土層、シルト層が堆積し、その下に厚さ1.5mの粗砂の堆積が認められた。これは古墳時代の旧大和川の氾濫流路（溝5）である。図22の2～10の土器は粗砂層から出土した。弥生前期から古墳時代前期の土器である。溝5の最下層には厚さ10cmの淡灰黒色粘土層があり図22の11～18の土器、19の勾玉が出土した。これらはいずれも布留式期のもので、溝5は幅20m以上、深さ2.7mでは東西方向に流れている。G.L.-6m以下はトレーンで確認した。黒色粘土層を4層分確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。

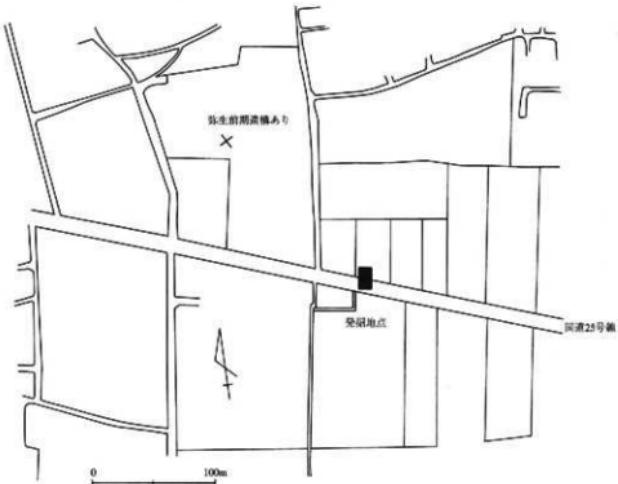
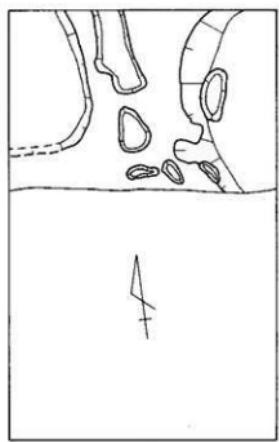
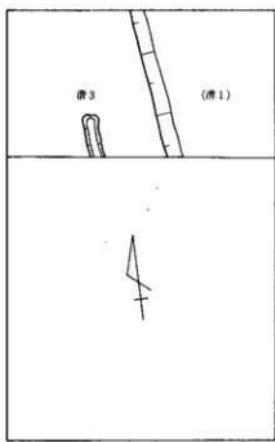


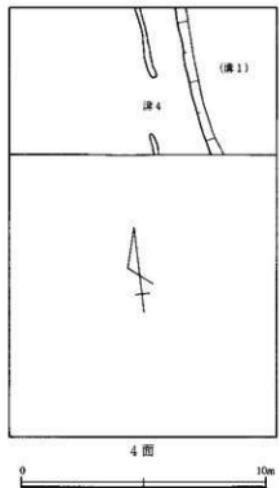
図19 植松遺跡発掘調査位置



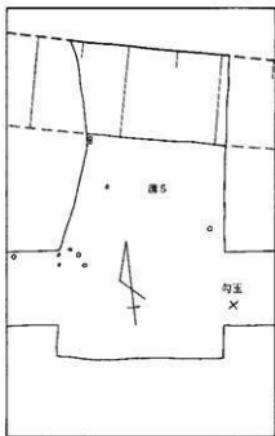
1面



3面



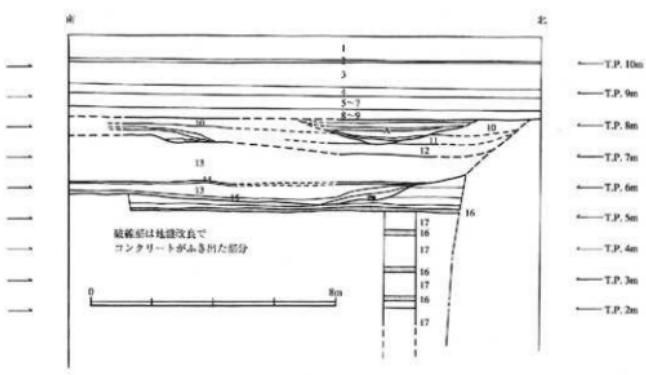
4面



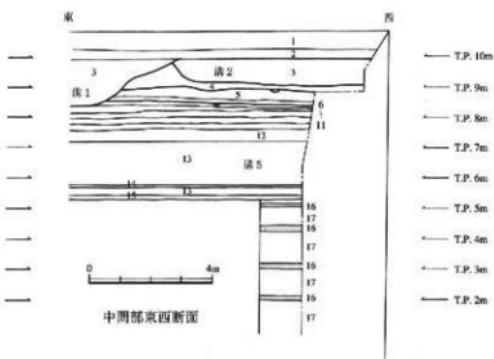
5面

0 10m

図20 植松遺跡平面1、3、4、5面



西壁南北断面



- |            |               |               |
|------------|---------------|---------------|
| 1. 淤泥      | 7. 淡灰褐色シルト    | 12. 淡灰黒色シルト   |
| 2. 淡黄褐色粘土  | 8. 淡灰色粘土      | 13. 粗砂 (第5中層) |
| 3. 粘土(氾濫)  | 9. 淡灰褐色微砂混り粘土 | 14. 淡灰色粘土混り粗砂 |
| 4. 淡灰褐色粘土  | A. 清5の最終堆積    | 15. 淡灰黑色粘土    |
| 5. 淡灰褐色シルト | 10. 淡灰褐色粘土    | 16. 黒色粘土      |
| 6. 青灰褐色粘土  | 11. 淡灰黑色粘土    | 17. 淡青灰色粘土    |

図21 植松遺跡南北・東西断面

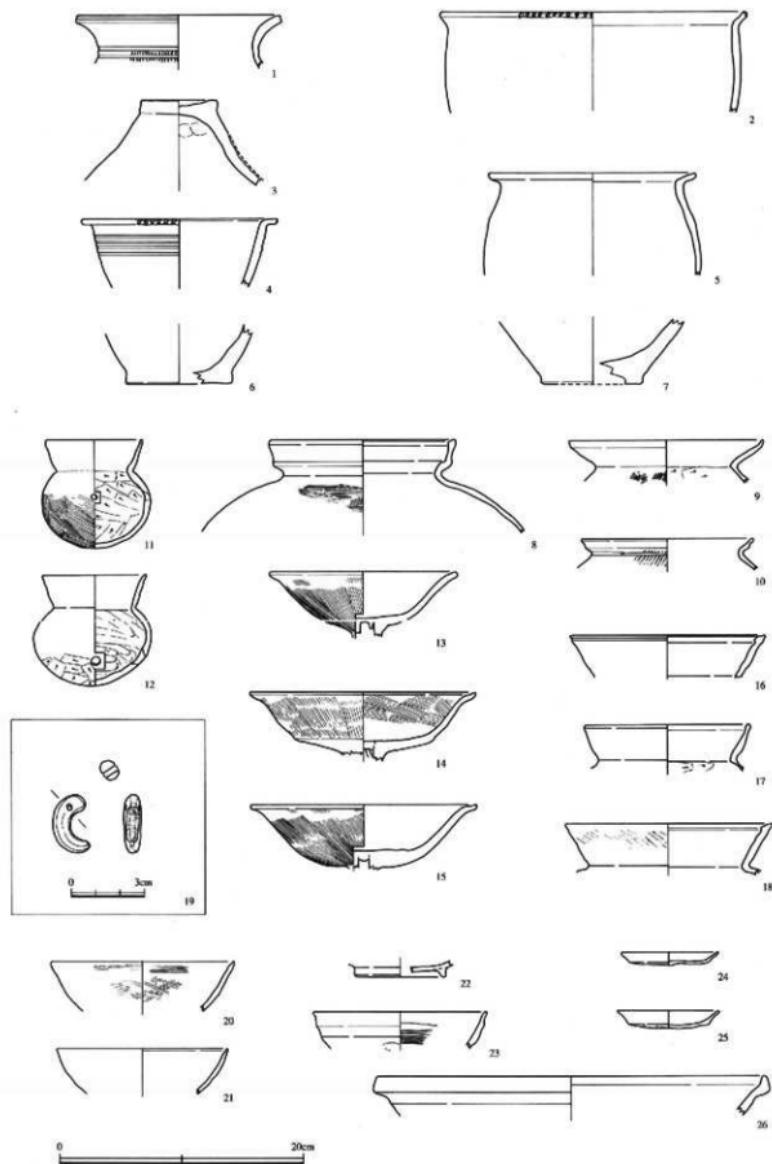


図22 植松遺跡出土遺物

# 図 版



中田遺跡発掘調査地点（南西から）

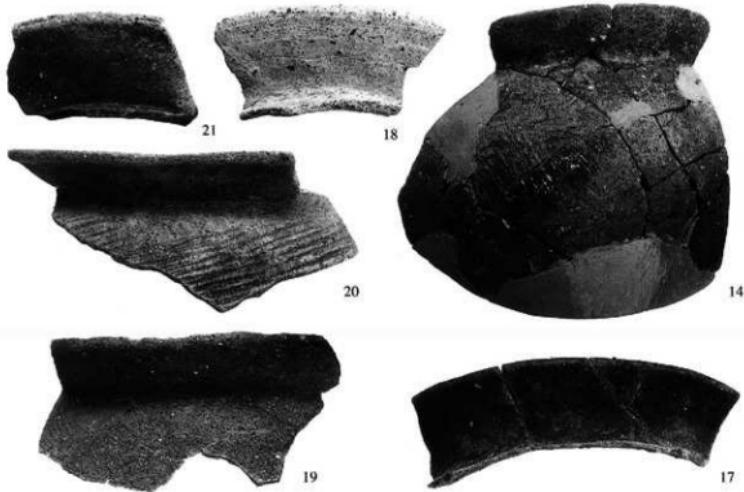
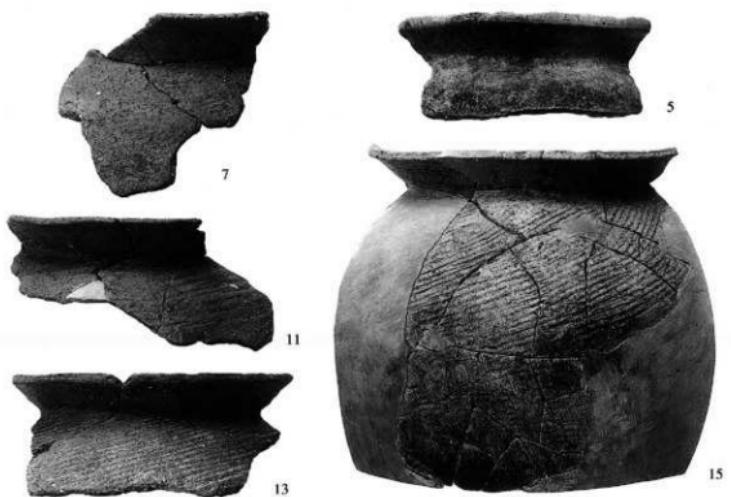


中田遺跡 溝（北から）



同上 西壁断面（東から）





中田遺跡出土遺物



28



31



29



32



30



35



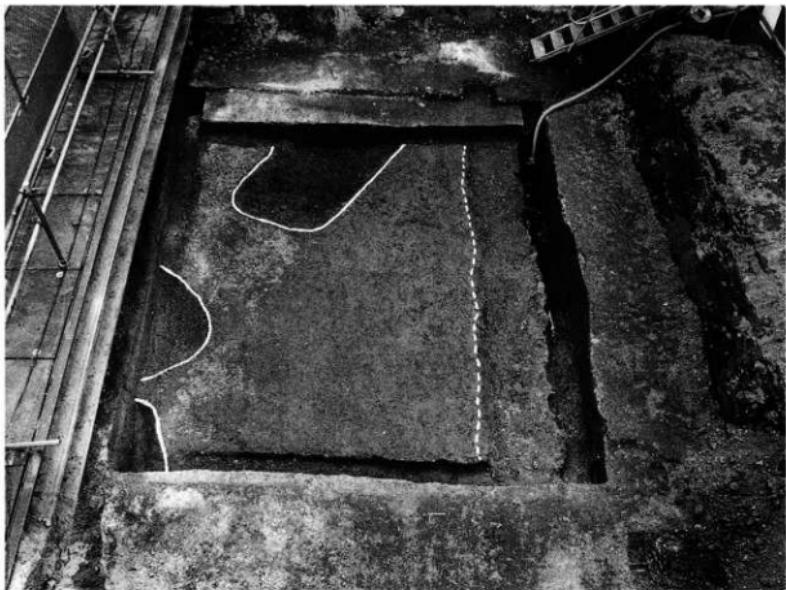
33



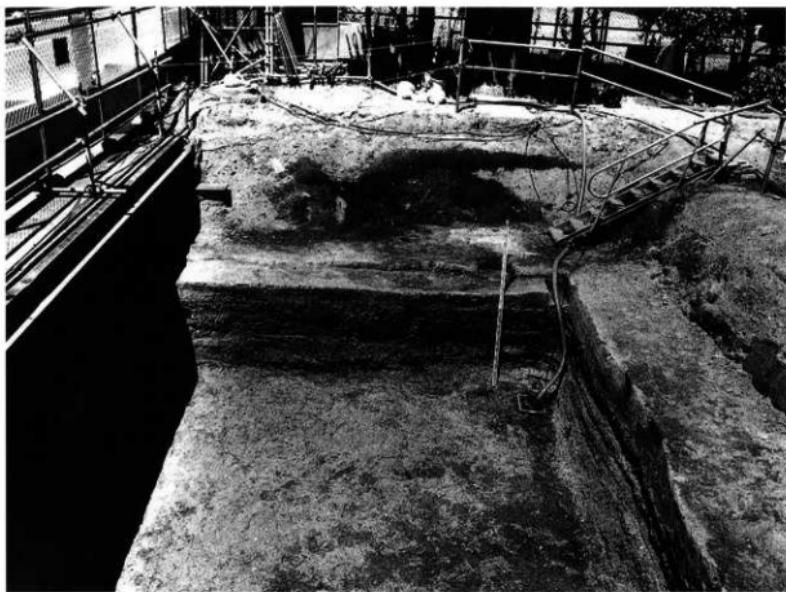
36



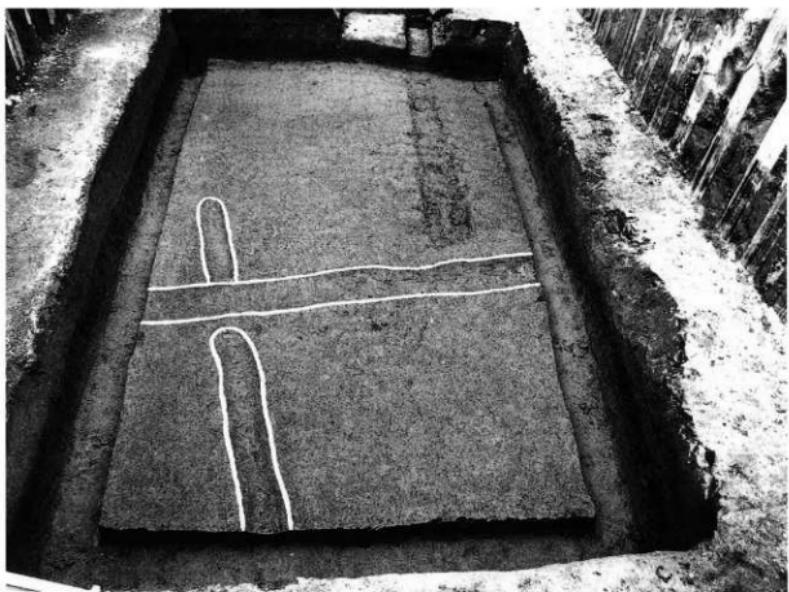
34



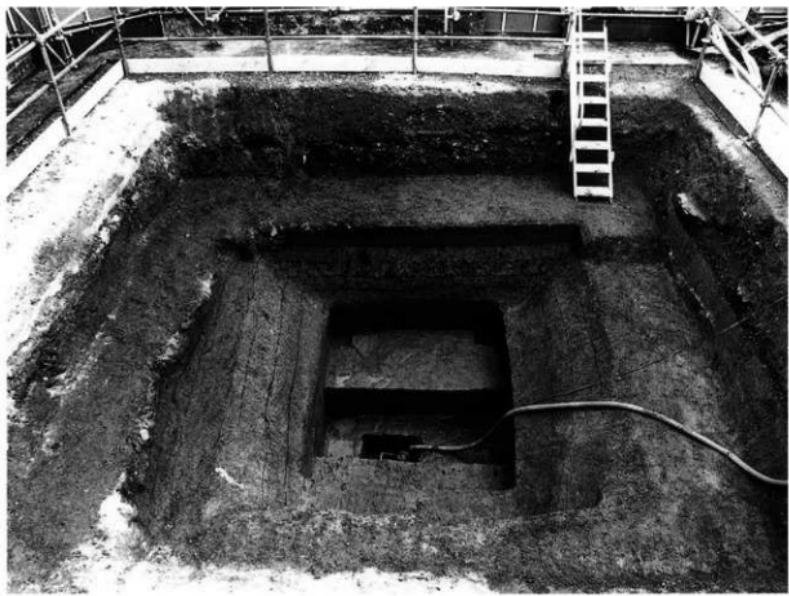
東郷遺跡 土坑1～3（東から）



同上 断面（東から）



小阪合遺跡 北西部溝（東から）



同上 南東角部全景（北から）



亀井遺跡調査区全景（南から）



同上 断面（南西から）



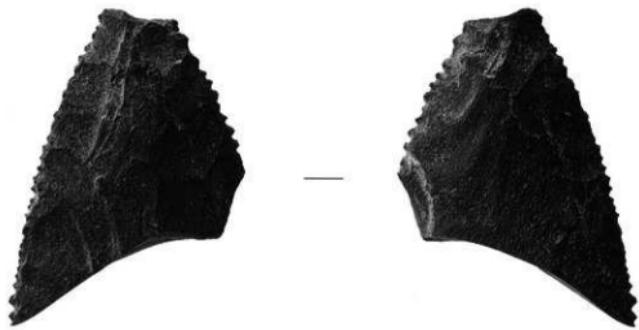
山賀遺跡 槽渠 土坑（南から）



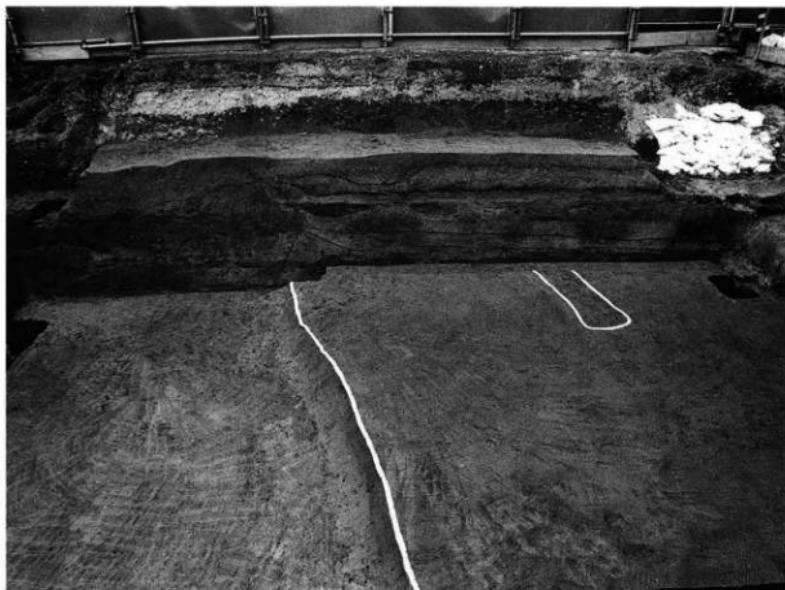
同上 溝 T.P.2.4m付近（北から）



山賀遺跡 下層断面 T.P.0m付近（東から）



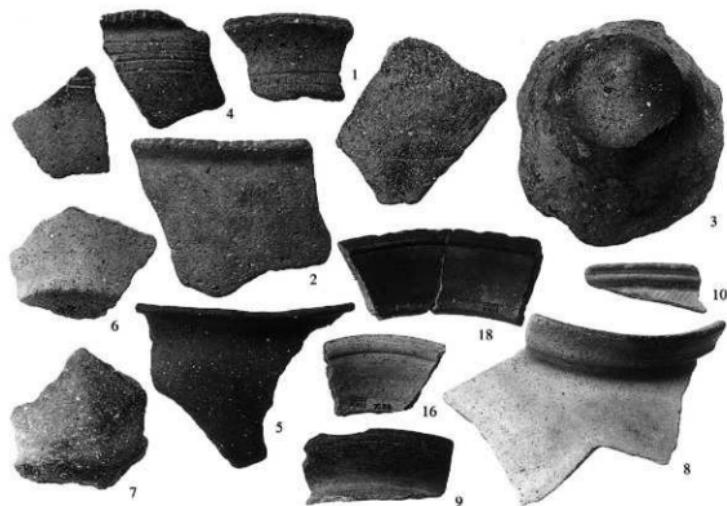
山賀遺跡出土石器（実大）



椎松遺跡 溝1、溝3（北から）



同上 溝5（東から）



植松遺跡出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	なかたいせきほかはっくつちょうさほうこく
書名	中田遺跡他発掘調査報告
副書名	寝屋川流域下水道事業に伴う
卷次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2002-3
編著者名	泉本知秀 山田隆一
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	平成15年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村 遺跡番号	○○°	○○' "			
なかたいせき 中田遺跡	やおしなかた 八尾市中田5丁目	27212 28	34°36'55"	135°37'06"	2002年4月19日～ 4月26日	18	寝屋川流域下水道下水管渠築造工事
	やおしやおぎた 八尾市八尾木北6丁目	27212 28	34°36'32"	135°37'09"	2002年6月10日～	5	
とうごういせき 東郷遺跡	やおしづかりうち 八尾市光町2丁目	27212 37	34°37'39"	135°36'33"	2002年7月19日～ 8月30日	120	寝屋川流域下水道下水管渠築造工事
	やおしなみなこさかあいちょう 八尾市南小阪合町1丁目	27212 40	34°37'17"	135°36'56"	2002年10月10日～ 10月11日	30	
こさかいいせき 小阪合遺跡	やおしなみなこさかあいちょう 八尾市南小阪合町1丁目	27212 40	34°37'15"	135°36'59"	2002年2月6日～ 2月12日	20	寝屋川流域下水道下水管渠築造工事
	やおしなみなみかめいちょう 八尾市南龟井町3丁目	27212 26	34°36'45"	135°34'41"	2002年12月2日～ 12月11日	45	
やまとがいせき 山賀遺跡	やおししんじやちょう 八尾市新家町4丁目	27212 32	34°38'30"	135°35'54"	2002年11月12日～ 2003年1月22日	104	寝屋川流域下水道下水管渠築造工事
	やおしながはたちょう 八尾市永畠町2丁目	27212 63	34°36'31"	135°35'52"	2002年10月17日～ 2003年3月17日	216	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中田遺跡	集落	古墳時代	溝	土師器	
東郷遺跡	集落	弥生時代	流路、土坑	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	
小阪合遺跡	集落	鎌倉～室町時代	水田	須恵器、瓦器	
龜井遺跡	集落	弥生時代	流路	弥生土器	
山賀遺跡	集落	弥生時代～中世	流路	弥生土器、石器、須恵器、土師器	
植松遺跡	集落	古墳時代～中世	流路、溝	弥生土器、土師器、勾玉	

大阪府埋蔵文化財調査報告 2002-3

中田遺跡他発掘調査報告

-寝屋川流域下水道事業に伴う-

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571  
大阪市中央区大手前2丁目  
TEL. 06-6941-0351

発行日 2003年3月31日

印刷 大藏印刷工業株式会社  
大阪府羽曳野市誉田3-22-21  
TEL. 0729-58-3344

